様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２２ 日現在

機関番号：６２６１８
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０５３８

研究課題名（和文）多様な方言資料の横断的分析による新たな方言分布研究

研究課題名（英文）The New Approach to Study Dialect Distribution by Various Types of Dialect Materials

研究代表者
鑓水　兼貴（YARIMIZU, Kanetaka）

大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・時空間変異研究系・プロジェクト非常勤研究員

研究者番号：２０４１５６１５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、関東地方を中心に、「音声」「語」「文」「談話」の各言語単位を含めた、研究・非研究を問わず、様々な手法によって収集された方言資料について、データベースを作成し、複数の異なる資料を横断的に検索するための考え方と技法を検討した。そして横断的検索を行って、言語地図を作成するツールを作成した。
　資料横断的な研究をすることで、これまで言及されてこなかった言語事象の地理的分布の発見や、方言形成の理論的考察に貢献することができた。

研究成果の概要（英文）：In this study, we created the database of dialect materials collected by various methods (including the non-research purposes) and various language unit (sounds, words, sentences, discourse etc.) mainly in the Kanto and Tohoku region.
We considered the idea and techniques of search method for different types of dialect materials and developed software to create dialect maps by the search of the dialect materials.
Study by different types of dialect materials contributed to discovery of geographic distribution of the new linguistic phenomenon and the theoretical considerations of dialect formation.

研究分野：方言学

キーワード：方言学　言語地理学　日本語学　社会言語学

１．研究開始当初の背景

方言分布の研究は、現代日本語の成立を考える上でも重要な研究である。特に関東方言は共通語の基盤方言であるにもかかわらず、記録は他地域よりも危機的状況にある。資料が限られる中、分布調査以外の多様な方言資料を利用することが考えられる。このため、資料を個別に解釈するのではなく、多様な資料を網羅的に収集・整理し、それらを統一的・総合的に扱った研究が必要である。

「方言データベース」には、様々な言語単位（音声・語・文・談話など）の調査資料があるが、このほかにも昔話・民話集や方言集といった非研究目的の資料があり、近年重要性が指摘されている。

複合的に資料を利用するためには、方言資料の推定年代や推定地域など、資料性を担保するための研究方法の確立が必要である。技術の発達により、既存資料の電子化自体は急速に進展している。しかし資料横断的な活用は想定されていないため、分析方法についての言語学的見地を踏まえた検討が必要とされている。

２．研究の目的

本研究の目的は、主に関東地方で収集されてきた様々な種類の方言資料を横断的に分析し、従来言及されてこなかった新しい方言分布を発見すること、新たな地域差の分析をもとに関東地方における方言分布の再検討を行い、日本語の方言分布の形成過程や、共通語化の過程について解明することの２点である。

具体的には、(1)関東地方とその周辺地域における方言資料のデータベースの作成、(2)異なる言語単位（音声、語、文、談話など）間の資料横断的な分析方法の検討と分析ツールの開発・公開、(3)データベースと分析ツールを利用した言語事象の新たな地域差の発見と分析、の３点を遂行する。

精度や目的の異なる資料を統合して扱うことによって、これまで分析されてこなかった多くの方言分布からの言語動態の研究を目指す。

３．研究の方法

研究方法は、以下の順に遂行する。

第一に、関東地方とその周辺地域における方言資料のデータベースを作成する。全国規模の資料など、関東地方を含む広域調査資料も対象とするほか、他地域での応用も視野に関東地方以外からも地域を選びデータベース化を行う。「音声」「語単位」「文単位」「談話」の言語単位ごとに、研究・非研究目的の資料について総目録を作成する。調査の背景や、資料の性質などの情報など、可能な限り電子化作業を行う。

第二に、複数の異なる資料を横断的に検索するための考え方と技法を、上記の研究・非研究目的の資料ついて検討する。検討は音声表記の統合方法、談話の区切りの単位などの言語的側面や、非研究目的の資料の研究利用方法などの資料的側面、データ書式の違いなどの技術的側面から行う。検討結果をふまえてコンピュータ用の検索・地図化ツールを開発し公開する。

最後に、これまで言及されてこなかった言語事象の地理的分布をもとに、再度、関東方言の位置づけや地域間の関係について明らかにする。また資料には年代差があるため、言語変化の新たな発見や、関東方言と共通語の関係の解明についても分析する。

４．研究成果

(1)方言資料に関する総目録の作成とデータベース化

関東地方とその周辺地域における方言資料については、吉田・三樹編(2014)を継続して文献の拡充を行い、同時にデータ画像の収集も実施した。今後も継続予定である。

関東以外の地域の資料については、特に戦前期の岩手県における方言集データを収集して、データベース化を実施した（発表⑩）。このほか、埼玉県、群馬県、栃木県の方言集について方言辞典を中心に電子化を行ったほか、東京都の方言辞典については文字データを入手して、データベース化を行った。

全国資料については、国立国語研究所で未公開であった「全国方言文法の対比的研究」の調査資料について電子化作業を進め、ほぼ完了した。今後公開に向けた整備を行う予定である。また、『日本言語地図(LAJ)』『方言文法全国地図(GAJ)』の略図画像を収集してデータベース化を行ったほか、GAJ と GAJ の準備調査、『方言の形成過程解明のための全国方言(FPJD)』のデータに関しては、データの対照を行うための項目横断検索ツールを開発した（図１）。

番号	地点	第85図	第211図	第214図
		起きろ	起きろ(やさしく)—総合図–	起きろ(きびしく)—総合図–
569616	東京都西多摩郡奥多摩町川井	(1.01)okiro	(64.00)okinajo	(1.00)okiro
569662	東京都西多摩郡檜原村数馬	(1.01)okiro	(1.00)hajakɯokiro	(1.00)gakko:ŋaosokɯnarɯkarahajakɯokiro
569757	東京都東大和市高木	(1.01)okiro	(68.00)okine:kajo<注><静かに言う。>	(1.00)hajakɯokiro
569895	東京都杉並区永福3丁目	(9.00)okirojo	(4.00)hajakɯokirojai	(114.00)konobakajaro:itsɯmadenetendai
569961	東京都台東区竜泉3丁目	(1.01)okiro	(163.00)okirɯdʒikandʒa:naino	(2.00)okirojosonnakottʃa:damedʒane:ka
660736	東京都町田市上小山田町	(1.01)okiro	(54.00)okinasaijo	(47.00)hajakɯokinasaijo

図１・GAJ 項目横断検索例

(2)データベースの利用方法の検討ならびに

利用ツールの開発と公開

首都圏における分析を行う上で、必要な用語整理と概念に関して考察を行った（論文⑦・論文⑪）。つづいてデータの横断的分析の必要性ついて考えるため、データの種類ごとに検討を行った。

言語地理学的データに関しては、データベースの整備に必要な要素についての研究（発表⑥）を行った。

談話データに関しては、検索方法に関する研究発表（発表⑦）を行ったほか、国立国語研究所の『全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成』のデータの検索ツール作成も行った。

方言集データに関しては、前述の岩手県方言の方言集データをもとに、音声表記の整理データを作成し、横断検索によって、方言集データから言語地図を作成するデモンストレーションも行った（発表①）。

(3)新たな言語事象の地域差の発見と分析

横断的研究による新規事象の発見については、前述の方言集データの地図作製システムを活用した竹田晃子(2016)（発表①の研究発表会）において、学術的研究データで網羅できなかった調査データが方言集によって補完される事例を示した（図２）。

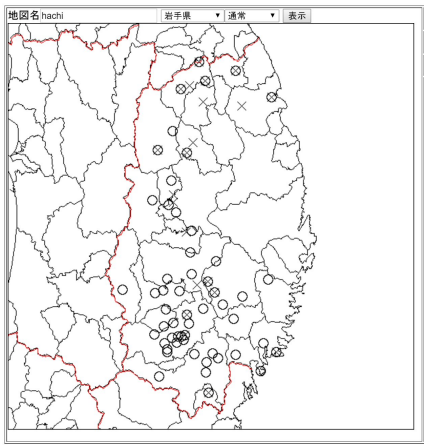

図２・方言集横断検索例

新規事象の調査に関しては、継続して研究している電子メールを用いた調査システム（論文⑩）や、全国規模のアンケート調査（論文⑨）によって、首都圏や大都市圏における方言分布の構造について考察をおこなった（発表③）。

また、WEB 調査による全国 19 万人調査データを利用した数量的分析(論文②）によって、方言調査における大規模アンケートの有用性についても論じた。

このほか、現代の方言調査とは異なる、明治期の方言調査資料の意義について、国語調査委員会資料を用いた研究を行い（論文⑤)、方言調査比較の重要性について論じた。

＜引用文献＞

①吉田雅子・三樹陽介(編)，『首都圏の言語に関する研究文献目録（稿)』，国立国語研究所,2016.

②竹田晃子，郷土教育資料に見る岩手の方言分布－沿岸被災地の言葉の特色－，研究報告会「明治期から昭和初期の地方教育資料が語る岩手県の「国語」と「方言」」，2016 年 2 月 20 日，岩手県立図書館.

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１４件）

① 大橋純一，方言音声調査の記述報告－宮城県白石市－，秋田大学教育文化学部研究紀要，査読無，第 71 号，2016，pp15-24.

② 竹田晃子・鑓水兼貴，痛みを表す言語表現ウズクの地域差，国立国語研究所論集，査読有，第 10 号，2016，pp221-243.

③ 大橋純一，口唇の特徴から見た東北方言の合拗音の諸相－ハ行唇音との比較を通して－，方言の研究，査読有，第 1 号，2015，pp5-27.

④ 新井小枝子，群馬県方言における粉食に関する語彙－粉食語彙の記述的研究から粉食文化の解明へ－，方言の研究，査読有，第 1 号，2015.

⑤ 竹田晃子，国語調査委員会による音韻口語法取調の現代的価値－岩手県の第二次取調稿本の分析を事例として－，日本語の研究，査読有，第 11 巻 2 号，2015，pp101-116.

⑥ 大橋純一，新潟県北部言語接触地域における方言音声の経年比較－１高年層話者のガ行入り渡り鼻音の実態に即して－，秋田大学教育文化学部研究紀要，査読無，第 70 号，2015，pp29-37.

⑦ 鑓水兼貴，「首都圏の言語」をめぐる概念と用語に関して，国立国語研究所論集，査読有，第 8 号，2014，pp197-222.

⑧ 鑓水兼貴，日本語教育と日本語，コーパス外国語教育研究，査読無，第 17 号，

2014，pp198-206.
⑨ 鑓水兼貴，「全国若者語調査」結果概観，専修国文，査読無，第 94 号，2014，pp174-187.
⑩ 鑓水兼貴，首都圏若年層の言語的地域差を把握するための方法と実践，国立国語研究所論集，査読有，第 6 号，2013，pp217-243.
⑪ 三井はるみ，地域語の観点からみた首都圏の言語の実態と動向の一側面，国語研プロジェクトレビュー，査読無，第 4 巻第 2 号，2013，pp118-126.
⑫ 小西いずみ・井上優，富山県呉西地方における尊敬形「～テヤ」：意味・構造の地域差と成立・変化過程，日本語の研究，査読有，第 9 巻 3 号，2013，pp33-47.
⑬ 井上文子，方言ロールプレイ会話におけるコミュニケーション機能について，国語研プロジェクトレビュー，査読無，第 4 巻第 2 号，2013，pp127-135.
⑭ 小島聡子・竹田晃子，岩手県における郷土教育資料の概要―方言を中心に―，平成 25 年度文化庁委託事業「三陸の声を次世代に残そうプロジェクト」報告書，査読無，2014，pp1-10.

〔学会発表〕（計１３件）
① 鑓水兼貴，方言データベースを地図化する，研究報告会「明治期から昭和初期の地方教育資料が語る岩手県の「国語」と「方言」」，2016 年 2 月 20 日，岩手県立図書館，岩手県盛岡市.
② 鑓水兼貴，愛知県岡崎市における敬語行動の経年調査，JLVC 2016「再考 ことばの中の時空間」ワークショップ「日本語と方言の一世紀―社会言語学と歴史言語学が明らかにしたもの―」，2016 年 2 月 14 日，国立国語研究所，東京都立川市.
③ 鑓水兼貴・三井はるみ，言語調査システムによる首都圏若年層の高密度調査，人文科学とコンピュータ研究会，2015 年 12 月 19 日，同志社大学京田辺校地,京都府京田辺市.
④ 大橋純一，方言音声の追跡調査―新潟県北部のガ行入り渡り鼻音について―，言語地理学フォーラム，2015 年 6 月 7 日，国立国語研究所：東京都立川市.
⑤ 半沢康，グロットグラム調査データの実時間比較，言語地理学フォーラム，2015 年 3 月 8 日，国立国語研究所，東京都立川市.
⑥ 鑓水兼貴，「全国方言分布調査」データベースの分析支援，言語地理学フォーラム，2014 年 11 月 29 日，富山大学，富山県富山市.
⑦ 鑓水兼貴，岡崎敬語調査反応文データベースの利用について，語彙研究会 定例研究会，2014 年 11 月 08 日，愛知学院大学大学院栄サテライト，愛知県名古屋市.
⑧ 小西いずみ，活用体系の変異・変化と地理的分布，日本語学会ワークショップ，2014 年 10 月 18 日，北海道大学，北海道札幌市.
⑨ 鑓水兼貴，東京のことば・首都圏のことば ―大学生アンケート調査より―，変異理論研究会，2014 年 5 月 17 日，早稲田大学，東京都新宿区.
⑩ 竹田晃子，昭和 11 年資料の方言調査，文化庁委託事業「三陸の声を次世代に残そうプロジェクト」研究報告会「眠りから覚めた郷土教育資料と、被災した岩手のことばの現在」，2014 年 3 月 1 日，岩手県立図書館，岩手県盛岡市.
⑪ MITSUI Harumi，YARIMIZU Kanetaka，KAMEDA Hiromi，KUNO Mariko，TANAKA Yukari，A Study of the geographical distribution of lexical variation among younger generation speakers in the Tokyo metropolitan area，Urban Language Seminar，2013 年 8 月 17 日，広島市文化交流会館，広島県広島市.
⑫ 新井小枝子，〈桑の実〉の方言分布と伊藤信吉方言資料，群馬県立女子大学国語国文学会，2013 年 6 月 29 日，群馬県立女子大学，群馬県佐波郡玉村町.
⑬ 竹田晃子，災害時の医療現場向け方言手引き― 方言を知る・地域を知る―，東京女子大学学会主催 公開連続講演会「ウェルフェア・リングイスティクス―人々の幸せにつながる言語学―」（招待講演），2013 年 6 月 11 日，東京女子大学，東京都杉並区.

〔図書〕（計３件）
① 小林隆・大西拓一郎・鑓水兼貴・他，ひつじ書房，柳田方言学の現代的意義―あいさつ表現と方言形成論，2014，p416.
② 小林賢次・小林千草・小西いずみ・他，勉誠出版，日本語史の新視点と現代日本語，2014，p644.
③ 山崎誠，服部匡，小西いずみ，他，和泉書院，形式語論集，2013，p377.

６．研究組織
(1)研究代表者
鑓水　兼貴（YARIMIZU Kanetaka）
大学共同利用機関法人人間文化研究機国立国語研究所・時空間変異研究系・プロジェクト非常勤研究員
研究者番号：20415615

(2)研究分担者
新井　小枝子（ARAI Saeko）
群馬県立女子大学・文学部・准教授
研究者番号：90631789

井上　文子(INOUE Fumiko)
大学共同利用機関法人人間文化研究機国立国語研究所・時空間変異研究系・准教授

研究者番号：90263186

大橋　純一(OHASHI Jun-ichi)
秋田大学・教育文化学部・教授
研究者番号：20337273

久能　三枝子（KUNOU Mieko）
愛知学院大学・文学部・准教授
研究者番号：90468398

小西　いずみ（KONISHI Izumi）
広島大学・教育学研究科（研究院）・准教授
研究者番号：60315736

竹田　晃子（TAKEDA Kouko）
（2013-2014 年度）
大学共同利用機関法人人間文化研究機国立国語研究所・時空間変異研究系・プロジェクト非常勤研究員・特任助教（2015 年 3 月まで）
研究者番号：60423993

半沢　康（HANZAWA Yasushi）
福島大学・人間発達文化学類・教授
研究者番号： 10254822

三井　はるみ（MITSUI Harumi）
大学共同利用機関法人人間文化研究機国立国語研究所・理論・構造研究系・助教
研究者番号：50219672